

読書

■ 子どもが忌避される時代 なぜ子どもは生まれにくくなったのか

本田 和子〔著〕

「次世代を作る」を公的な営みと主張

私事になり恐縮だが、私には子どもがいない。決意や選択の結果というより、何も選択せずいたら自然にこうなった、とこれまで思っていた。

著者は、少子化の根っこにあるのは「子ども忌避」の心性だとする。だとすると私も、自分でも気づかぬうちに「次世代の人間を作り出すという営み」を積極的に忌避していたのだろうか。これはただごとではない。

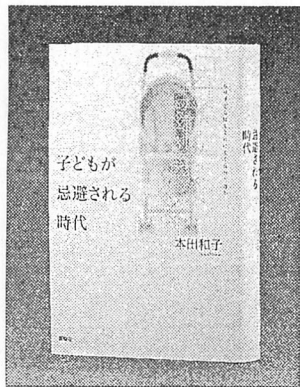
しかし著者は、この「子ども忌避」は現代女性の意識の変化のみによって起きたものではない、とする。それは、社会の近代化に伴ういくつかの変化の総体なのだ。そして、親子関係、生活空間、都市空間、情報ツールやメディア、犯罪など、それぞれの要素ごとに「子ども感」の変化の歴史を丹念にたどっている。

たとえば、親子関係に関する章には、西欧文明の輸入である「ホーム主義」と前近代社会の「イエ」概念が結びついた結果としての「緊密な母子関係」がどういうプロセス

で変遷していったかが描かれる。家電製品やインスタント食品、塾の普及などの結果、母親は子どもにとって「なくてはならない者」ではなくなっている、親子は互いに必然性の乏しい存在となってしまった。そしてもちろん、この親子関係の希薄化は、「子ども忌避」の要因のひとつにしかすぎない。

なるほど。なんとなく子どもがいない私も、明治以降の複合的な社会変動のひとつの結果だったということか。「産まない女はワガママ」と責められるよりは「近代化の必然」と言ってもらったほうが気がラクだが、それで問題が解決したわけではない。著者は、「人」という種を絶滅から守るための生殖行為を、単なる私的行為を超えた「大いなる目的に奉仕する『公的』な営み」に位置づけようとする。「その責務を果たしていない私っていったい……」とまたまた「私」に拘泥してしまうのが、そもそも近代の病理なのだろう。近代的自我と「子ども」は両立するの否か。あまりにもむずかしい問題だ。

評・香山 リカ (精神科医)



新耀社・2940円

／ほんだ・ますこ 31

年生まれ。お茶の水女

子大元学長、名誉教授

(子ども学)。